

作業後は日誌をつけましょう

山都町 有機水稻栽培暦

(お米の食味と品質目標)

- 玄米タンパク質含有率6.5%以下
- 整粒歩合80%以上
- 一等米比率90%以上
- 適正水分15% (過乾燥米は胴割れし易い)

月旬	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月以降	
生育経過	播種期 育苗		分けつ期	最高分けつ期	幼穂形成期	出穂期	登熟期	
生育ステージ	発芽・緑化・硬化期		活着期	有効分けつ	穂ばらみ	穂ぞろい		
水管理イメージ								
			移植後1週間は浅水で活着推進	葉先が水面から出る程度の浅水	深淵 間断かんすい	深淵 間断かんすい	低温強風時深淵	間断かんすい やや深淵
主な栽培管理	荒田耕起 緑肥草丈25~30cm	元肥散布・耕起 適期に粉碎 緑肥草丈25~30cm	荒代 緑肥鋤込 田植2週間前	畦畔除草・田植え前 移植 機械除草 ※ 苗活着後導入	※ 田植2週間後投入 アイガモ除草 畦畔除草	種肥 ※ 出穂期20日前 ※ 出穂期10日前 畦畔除草・カメムシ対策	刈取の10日~2週間前 落水 手取除草・残りビエ 畦畔除草・収穫前	
主な作業	本田準備	播種 元肥	田植	除草対策	種肥	登熟向上		
施肥基準	<p>【元肥】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○元肥は8~10kgN/10a目安、有機質肥料を田植3週間前に散布して15~20cmで浅く耕起し、碎土は乾田状態で行う。 ○秋耕を励行して地力を高めることを前提とし、種肥は生育状況に応じて、1~2kgN/10a程度。 ★施肥量は土壌分析値を目安に地力に応じて加減 			<p>カラースケールによる葉色判断 【BLOF理論に基づく丈夫な稲づくりで品質向上と収量確保】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ミネラル資材 (Ca、Mg、ケイ酸) ・稲の細胞壁を強化する酢酸、地力アップの腐植酸 <ol style="list-style-type: none"> ① 田植後の苗の植え痛み軽減・活着促進を兼ねて ② 分けつ期に葉色を見て緑色が薄ければ追肥の検討 ③ 高温障害や倒伏防止、登熟度や品質の向上と収量確保 				

栽培のポイント

秋耕

○収穫後の地温が高い年内の早い時期に荒田(表層10-15cm)起こし

耕起・元肥

- 緑肥(ヘアリーベッチ等)作付田は、田植の2週間前までに鋤込む
- 田植2~3週間前に有機質肥料(油粕、米糠、魚粕、ボカシ肥等)投入
- 施肥量目安/10a 窒素: 8~10kg、リン酸: 10~12kg、カリ: 5~6kg
- 土づくり資材の施用:
牛ふん堆肥は1トン、鶏糞堆肥は500kg/10a程度
苦土石灰・ケイ酸・リン酸の補給により土の酸性化を防止し、稲の体を作っているケイ酸の吸収を高め、倒伏の少ない熟色・登熟の良い籾を作ります

育苗

- 種子更新を心掛け塩水選(いもちや稲こうじ罹病籾、不良籾の除去)
- 温湯消毒: 60℃の温湯に10分間浸水・浸種は十分に、13℃で8日間(積算水温1000℃超え)
- 播種量の厳守: 吸水籾80~100g/箱の薄播きによる健康な苗づくり
- 有機認証床土を使用、有機認証肥料を30~50g(窒素2.5g/箱割合)混合

田植え

- 栽植密度は疎植の44~50株/坪(30cm×22~25cm)
- 田植後、活着まで浅水(5cm程度)で管理(ジャンボタニ被害軽減策)

水管理

- 苗の活着後(田植10日後)、深淵(10cm程度)で水管理
- アイガモ、アイガモロボット等の機械除草を開始

中干し

- 1株あたり18本になったら中干しを1週間程度実施
- 中干し後は間断灌水、出穂期は深淵、登熟期は気温次第で浅水~深淵水管理

カメムシ対策

- カメムシの巣窟を減らすため畦畔や農道の草刈を行い、出穂期の10日前までに畦畔除草を終える(ウツカ、ヨコバイ、カメムシ、いもち病等)

落水

- 収穫の10日~2週間前、湿田の場合は早めに落水

収穫

- 穂の9割以上の籾が黄化した時期が収穫適期

防除基準

種子消毒

- 塩水選別後の種を温湯消毒し、苗もち、立枯細菌病、もみ枯細菌病、ほか苗病対策
- 苗箱水洗: 前年使用した下敷シート、被覆資材の洗浄

育苗・疎植

- 太く短く固い健全な苗づくりと疎植を心掛ける。

除草

- 苗活着後は雑草を観察しながら深淵水管理を行う。
- ジャンボタニの食害に注意しながら深淵水管理を徹底。
- アイガモ、アイガモロボット等の除草対策の適期投入。

腐熟した発酵肥料

- ※適正量の肥料投入、過剰施肥に注意
- 窒素の過剰な吸収を防ぎ、斑点米の減少(ウツカ・ヨコバイ・カメムシ・いもち対策)

畔の草刈り

- ※ウツカ、カメムシ対策

病害虫

- 病害虫に強い固いイネづくり(BLOF理論参照)



「稲わらの秋すき込み」+「ケイ酸資材の施用」⇒地力増進!

土壌中の養分は、毎年、土からの溶脱や籾・稲わらと共に圃場外へ持ち出され、水田を元の良い状態に戻すのに時間が掛かります。異常気象に強い「丈夫な稲づくり」のために、ケイ酸資材の投入や籾・稲わらを有効に活用しましょう。

近年は異常気象下での稲作が常態化し、特に出穂期から登熟期間における高温や日照不足により登熟不良を招き、品質・収量低下の大きな要因となっています。品質向上と安定した収量を目指し、稲作の基本「土づくり」を実践し、異常気象に強い稲作を行いましょう。

- ◆高温障害 ⇒ 水分ストレスなどにより光合成の低下、呼吸によるデンプンの消費を増やします。
- ◆日照不足 ⇒ 光合成によるデンプンの生産を低下させます。
- ◆夜温の上昇 ⇒ 稲の呼吸速度が増加し、デンプンの消費を増やします。

堆肥散布も大事な「土づくり」!!

堆肥は原料によって、性質が異なるため、目的にあった堆肥を選択して使用しましょう。



地力増進のため秋耕、稲わら・根株のすき込みに取り組み、CN比10以上の完熟堆肥を500kg/10a以上施用しましょう。